

テキストの解釈と翻訳 ——パスカルの一語« mouvement »をめぐる——

永瀬 春男

あるテキスト（起点テキスト）を別の言語による訳文（目標テキスト）に移しかえようとする場合、それがいかなるジャンルに属するものであれ、内容の解釈と翻訳とが密接な関係にあることは言うまでもあるまい。翻訳者による原文の理解が不正確であれば、そのまま曖昧な訳文が生み出されることになる。あるいは原文に二様（もしくはそれ以上）の解釈が存在するため、複数の翻訳が併存する場合もあるだろう。こうした事態は、単語や文あるいは文法といった語学的・言語学的レベルにおいてのみならず、テキストをとりまく社会的・文化的背景、著者の思想、間テキスト性の理解といったさまざまな局面において生じうる。とりわけ欧米語のテキストを日本語に移しかえる場合のように、相対的に異質性の大きな言語間の翻訳には、隣接した関係にある言語間の翻訳では生じにくい独自の困難も存在する。一方、隣接言語間の翻訳においては訳者にとっても読者にとっても意識に浮上しにくい問題が、異質な言語間の翻訳において明瞭なかたちで前景化し、長らく等閑視されてきた問題に解決の糸口が与えられることもありうる。いわばこれは翻訳のもたらす恵みのごときものと言えよう。以下、本稿では、筆者の乏しい翻訳経験をも踏まえ、フランスの思想家パスカルのテキストを例にとりつつ、ひとつの語の翻訳が、それまで未知であった新たな視野を開くさまを考察してみたい¹。

1

もちろん他言語への翻訳以前に、起点となる言語の使用者にとっても、解釈上の難点が消えない例はいくらでも存在する。パスカルから典型的な例を二つ拾ってみよう。『パンセ』の断章中には、「太陽の海綿(spongia solis)」(L. 660, S. 544, B. 91) および「リアンクール公の、かわかますと蛙の話」(L. 738, S. 617, B. 341)なる記述があり、これらの表現が何を意味するのか長く謎とされてきた²。今日では二つの事例とも解決され、『パンセ』の当該断章の注釈に説明がある。詳細はそちらにゆずるが、どちらも典拠の発見が決め手となったケースである。「太陽の海綿」については、ルネ・ジャザンスキの論文(1942 年)によって解決がもたらされた³。「かわかますと蛙の話」はエルネスト・ジョヴィの論文(1928 年)により一応の決着がついたように見えたが、さらに後年、アントニー・

¹ 本稿の議論の中心部分は、次の拙著の一部をテキストの解釈と翻訳という視点から増補・再論したものである。『秩序と侵犯——パスカルにおける計算機体験の思想的意味——』、岡山大学文学部研究叢書、第 23 号、2002 年。

² 『パンセ』については、L, S, B でラフユマ版、セリエ版、ブランシュヴィック版の断章番号を表す。

³ René Jasinski, « Sur une pensée de Pascal », in *Revue d'histoire de la philosophie*, 1942 (article repris dans *A travers le XVII^e siècle*, Nizet, 1981)。

マッケンナの報告(1990年)によって一層確実と判断できる典拠が提示された⁴。いずれの場合も、20世紀の発見に至るまで、研究者たちがさまざまな解釈を提出してきたが、正解は長く隠されていたことになる。

古典的なテキストの翻訳にあたり、訳者はこうした種々の解釈の歴史をも踏まえ、それを訳文に生かすことになるが、時には翻訳者自身が従来になかった観点を提出し、それにもとづいた訳文を産出する場合が生じる。もっともどのような翻訳も多かれ少なかれ原テキストの再解釈を含まざるを得ないとすれば、ある意味で翻訳は常に新たな読み直しの契機をもつと言えるかもしれない。

パスカルは日本では昔から広く読まれ、多くの翻訳に恵まれてきた。とりわけ主著の『パンセ』には幾種類もの邦訳が存在し、何度も版を改めている。ブランシュヴィック版『パンセ』からラフユマ以降の諸版への定本の変更は、日本語訳にも大きな影響を与えずにはいなかった。また全集あるいは著作集についても、現在刊行途中のものを含め、これまでに三種類の異なる版が出版されている⁵。このうち全集は数学の主要な著作と物理学の全著作をも網羅するもので、こうした例は欧米にも見られないという。さらに日本におけるパスカル研究は、本国フランスについてきわめて盛んなもので、自然科学上の業績を対象とする研究も含め、つとに高い評価を獲得している。こうした研究と翻訳の盛況は無論相補的なものであり、両者はいわば手を携えるように発展してきたと言える。

2

本稿で検討するのは、パスカルの著述のなかの計算機に関する短い文書であり、そこで用いられるひとつの単語をめぐる解釈と翻訳の問題である。『パンセ』の著者パスカルは、ヨーロッパ最初の計算機の発明家でもあった。当時父親は徴税担当の役人であったが、夜遅くまで膨大な計算業務に煩わされる父の姿を見て、その労苦を軽減しようとしたのが着想のきっかけである。姉などの証言によれば、パスカル19歳のとき、おそらく1643年前半のことであった。熱中型の彼はたちまち制作に没頭し、およそ二年の年月をかけ、50台以上の試作品を経て、1645年に決定型の完成にこぎつける。彼はすぐにこの発明品を、時の大法官ピエール・セギエに献呈し、公開実演と販売に乗り出す。この過程で、計算機に関する二点の短い文書が書かれた(下記の文書1と2)。続いて偽造品の出現に衝撃を受けた作者は、製作と販売の独占的な権利を得るため、特許状の発給を願い出て許

⁴ Ernest Jovy, « L'histoire du brochet et de la grenouille de Liancourt » dans les *Pensées* », dans *Etudes pascaliennes*, t. IV, Vrin, 1928 ; Antony McKenna, « L'histoire du brochet et de la grenouille. Pascal et Izaak Walton », in *Courrier du Centre International Blaise Pascal*, n° 12, 1990.

⁵ 刊行順に次の三種がある。『パスカル全集』, 人文書院, 全3巻, 1959年(第2版, 1967年) ; 『パスカル著作集』, 教文館, 田辺保訳, 全7巻, 別巻2巻, 1980-1984年 ; 『メナール版 パスカル全集』, 白水社, 全6巻, 既刊2巻, 1993-1994年。『パンセ』については、松浪信三郎訳, 前田陽一・由木康共訳, 田辺保訳などが代表的なものであり、現在さらに別の翻訳も進行中である。なお松浪訳と田辺訳には、それぞれブランシュヴィック版とラフユマ版を底本とする異なる翻訳が存在する。

可される（文書 3）。この特許状は国王の署名入りの公文書であるが、その主要部分はパスカルが書いた申請書のほぼ逐語的な引き写しと考えられ、パスカル自身の作品に準ずるものとみなしてよい⁶。そこで、まず本稿で検討ないし言及するこれら計算機関連文書三点の表題を、フランス語原文とその拙訳で掲げておく。

1) *Lettre dédicatoire à Monseigneur le Chancelier sur le sujet de la machine nouvellement inventée par le sieur B. P. pour faire toutes sortes d'opérations d'arithmétique par un mouvement réglé sans plume ni jetons*⁷.

『大法官閣下への献呈の手紙。ペンも数え札も用いず、規則的な操作によって、あらゆる算術計算を行なうために、B. P. 氏によって新たに発明された機械について』（1645 年、以下『献呈の手紙』と略記）

2) *Avis nécessaire à ceux qui auront curiosité de voir la machine arithmétique, et de s'en servir*⁸.

『計算機を見、また使用したいとの興味を抱かれる方々に必要な手引』（1645 年、以下『手引』と略記）

3) *Privilège pour la machine d'arithmétique de M. Pascal*⁹.

『パスカル氏の計算機に対する特許状』（1649 年 5 月 22 日発給、以下『特許状』と略記）

このうち第 1 の『献呈の手紙』と第 2 の『手引』の二文書は決定型完成直後に執筆され、ひとつにまとめて四つ折り版 20 頁の冊子として印刷された。表紙にはこの印刷本全体の表題として、二文書のタイトルが「および(Avec)」の語で結んで掲げられており、各文書の初めにもそれぞれのタイトルが繰り返される。両文書は、内容面でももちろん密接な関連をもっている。問題になるのは特に『献呈の手紙』の表題の翻訳であり、従来の二種類の和訳は次のようになっていた。

『大法官閣下にたてまつる献辞——筆算にもよらず数え札をも用いずに機械的運動によって算術上のあらゆる種類の運算をおこなうためにブレーズ・パスカル氏によって新たに発明された器械に関して』（安井源治訳¹⁰）

⁶ Pascal, *Œuvres complètes*, éd. Jean Mesnard, Desclée de Brouwer, t.II, 1970, p. 711. 以下、この全集を OCM と略記する。

⁷ *Ibid.*, pp. 331-334.

⁸ *Ibid.*, pp. 334-341.

⁹ *Ibid.*, pp. 712-715.

¹⁰ 安井源治「パスカルの計算器が語るもの」、松浪信三郎編著『フランス哲学史論集』、創文社、1985 年、

『大法官閣下への献呈の手紙 筆算にもよらず数え札も使わず、正確な運動をすることによって、どんな種類の計算をもおこなうことのできる、B・P殿が最近発明なさった機械に関して』（田辺保訳¹¹）

ただし田辺訳は『献呈の手紙』の訳のみを含み、続く『手引』の訳文は掲げていない。これは科学論文を収録しないという、著作集の方針によるものである。

本稿の課題はこのタイトル中の« mouvement réglé」という表現の訳語を決定することである。上に掲げたように、従来の代表的翻訳はこの部分を「機械的運動」あるいは「正確な運動」と訳しており、「mouvement」を「運動」とする点で共通している。筆者はこれに対して、「mouvement」に「操作」の訳語をあて、問題の表現を「規則的な操作」と訳したい。これは一見些細な事柄のように見えるものの、実は文書全体の解釈にかかわり、ひいては計算機製作体験のもつ思想的意味の理解を左右しかねない重要な問題でもある。

この問題を考えるためには、関連文書全体における« mouvement »という語の用法を検討する必要がある。特に第2文書『手引』にはこの語の使用が目立ち、メナール版全集（元版）で7頁ほどのテキスト中、その数は18回にのぼる。この語は最も普通には「運動」を表すが、計算機関連文書中ではおよそ次の三通りの意味で用いられている。

- ① 機械の「内部装置・仕掛け」
- ② その内部装置の「運動・作動」
- ③ 外部操作面の車輪型ダイヤルを「動かす」という意味での「操作」（多くの場合「計算の操作（mouvement de l'opération ou des opérations）」という形で現れる）

まずこれら三つの語義を、現代の代表的辞書で確認しておこう。『フランス語宝典¹²』では項目« mouvement »の冒頭に、基本的語義として« [Le mouvement considéré dans ses manifestations] Déplacement (d'un corps) par rapport à un point fixe de l'espace et à un moment déterminé. »をあげ、その下位区分の三番目に次のように記している。「3. [Le mouvement est un phénomène produit, provoqué, artificiel] a) Déplacement régulier, contrôlé ou dirigé (d'un organe mécanique, d'un appareil, d'une machine, d'un projectile, etc.). »これが上記の②にほぼ対応するであろう。さらにその先で、同じ3のc)として、換喩表現による転義の派生を次のように指摘している。「P. méton.

174 頁。安井訳の初出は前掲の人文書院版『全集』，第1巻。

¹¹ 前掲の教文館版『著作集』第2巻，1981年，15頁。

¹² *Le Trésor de la Langue Française Informatique*, art. « mouvement ». イタリックは原文のまま。

Mécanisme destiné à produire, à entretenir, à transmettre un mouvement (notamment en horlogerie). »これが我々の分類の①に相当しよう。最後に③については、項目末尾近くの次の語釈が最も近いものである。「[Le mouvement anime des êtres vivants] 1. [Le mouvement concerne un individu] a) Fait de déplacer dans l'espace son corps ou certaines parties de son corps. »ここには引例に続き、連辞表現を多数掲げているが、我々の論点にかかわるものとしては、「*mouvement prompt, souple ; agilité, aisance des mouvements ; mouvements de bras, de main*」などが見つかる。

一方、フルティエールの辞書(1690年)には、①に相当する語釈として、次のような記載がある¹³。

« On appelle chez les Horlogers un *mouvement*, le dedans d'une montre, ou d'un horloge, qui fait tourner l'aiguille sans avoir égard à la boîte, au cadran, et autres qui y peuvent servir d'ornement, et en general de toutes les choses qui se meuvent par des ressorts secrets. »また、②と③には区別を立てず、次のようにまとめて論じている。「Transport d'un corps en un autre lieu, changement de place. »

3

上に区別した①～③の意味は無論相互に関連したもので、三者のあいだに常に厳密な境界を設定できるわけではない。ダイヤルの「操作」が内部「装置」の「運動」を引き起こすのであるからには、三つの語義は同じ事柄の表裏に過ぎないとも言えるからである。実際、日本語に移す場合は何らかの訳語を選択し、三種の意味に訳しわけざるを得ないが、フランス人が原テキストを読むとき、常にそうした区別を明確に意識しているかどうかは疑問である。しかしながら区別が重要となる場合が確かに存在し、それらをあえて訳しわけることを通して見えてくる事柄があるのも事実である。本稿の初めに翻訳の恵みと述べたのは、そうした事態を指してのことである。そこで以下に計算機関連文書から若干の例を引きつつ、三つの語義の使用を確認してみる。例文のあとには、厳密な翻訳ではなく、前後の文脈を織り込んだ大意を添えることにする¹⁴。

① 機械内部の「装置・仕掛け」

¹³ Antoine Furetière, *Dictionnaire universel*, Le Robert, 1978, art. « mouvement ». イタリックは原文のまま。

¹⁴ 計算機関連文書の拙訳は未刊行であるが、次の報告書に全文を公開してある。『パスカルの計算機に関する総合的研究(思想的意味の解明を中心に)』, 平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号13610607), 2004年。なお、本稿を通して、断りのない限り強調(斜体と下線)は筆者のもの。

(a) [...] un ouvrier de la ville de Rouen, [...], lequel [...] eut assez de hardiesse pour en entreprendre un autre [modèle], et, qui plus est, par une autre espèce de *mouvement* (『手引』, 第 11 段落)

「ルアンの職人のひとりが、厚かましくも自分でも一台、それも私のものとは仕掛けの異なる機械の製作を思いついた」という箇所。

(b) [...] s'ils n'y sont conduits expressément par ledit sieur Pascal, ou par une personne qui ait une entière intelligence de l'artifice de son *mouvement* [...] (『特許状』)

「職人たちが、パスカル氏、もしくは装置の仕組みを完全に理解した人物によって、明確な指図を受けない場合には」、有効な使用に必須の正確さと完全さを備えた状態に仕上げることは不可能だとする箇所。

(c) [...] ce qu'il prétend faire par l'invention d'un *mouvement* plus simple et qui opère néanmoins le même effet [...] (同)

パスカルが価格の引き下げを、「より簡単ながら同一の効果をもたらす装置の発明によって可能であると主張」しているという箇所。

用例(a)(b)の場合、絶対に別の解釈が不可能とは言えないとしても、第 1 の意味に解するほうがより適切と思われる。(c)の場合は、「ソトワール(sautoir)」と呼ばれ、パスカル苦心の発明になる繰り上げ装置への言及と考えられ、第 1 の意味でなければまずいだろう。

② 装置の「運動・作動」

(d) [...] il est aussi facile de faire mouvoir mille et dix mille roues tout à la fois, si elles y étaient, quoique toutes achèvent leur *mouvement* très parfait, que d'en faire mouvoir une seule [...] (『手引』, 第 5 段落)

計算機に「仮に千なり万なりの歯車がついていようと、それらを一度に、ただひとつの歯車とかわりないほど容易に動かすことができ、しかもどの歯車もみな完全な運動を遂行できる」という箇所。

(e) [...] l'instrument supplée au défaut de l'ignorance ou du peu d'habitude, et, par des *mouvements* nécessaires, il fait lui seul, sans même l'intention de celui qui s'en sert, tous les abrégés possibles à la nature [...] (同)

「機械のほうが無知や不慣れからくる欠陥を補い、確実な運動を通してひとりでに、使用者の意図さえ要さず、自然にとって可能なすべての短縮を行なう」という箇所。

これらの用例が、計算機内部の装置の「運動」を指しており、「装置」自体でも、使用者による器具の「操作」でもないことについて、異論の余地はないだろう。

③ 手動ダイヤルの「操作」

(f) Car pour la simplicité du *mouvement* des opérations, j'ai fait en sorte qu'encore que les opérations de l'arithmétique soient en quelque façon opposées l'une à l'autre, comme l'addition à la soustraction et la multiplication à la division, néanmoins elles se pratiquent toutes sur cette machine par un seul et unique *mouvement*. (同、第4段落)

「計算の操作の単純さについていえば、足し算と引き算、掛算と割算のように、いわば互いに反対の計算も、この機械ではみな単一の操作で行なえる」という箇所。

(g) Quant à la commodité de ce *mouvement*, il suffit de dire qu'il est insensible, allant de la gauche à la droite, et imitant notre méthode vulgaire d'écrire, fors qu'il procède circulairement. (同、第6段落)

「操作の便利さについては、円状の動きをする点を除き、文字の書法にならって左から右へ進むので、抵抗感のない自然な操作ができると言えば充分」という箇所。

両例とも手動ダイヤルの回転操作の意味で用いられていると考えざるを得ない。(f)例の場合だと、加減乗除の四則計算がみなダイヤルの一方向への回転（時計回り）というきわめて単純な「操作」で実行できるところにこの製品の眼目があるという主張であり、決して内部装置の運動が議論されているわけではない。

『手引』の第4段落から第7段落までは、計算機の「単純、容易、便利、迅速」という四大特性を順次説明する部分であり、それらの特性とはいずれも使用者による器具の「操作」にかかわるものである。(f)と(g)の文はその一部なのである。

4

以上の三つの語議の検討を経て、改めて計算機文書の表題にもどってみよう。問題の«*mouvement réglé*»を「規則的な操作」としようが、「運動」としようが、依然として大きな違いはないように見えるかもしれない。しかしここには単なる訳語の問題を超えて、計算機における内部と外部の対立、計算機操作盤を境界とする身体の秩序と精神の秩序の逆転という、計算機問題の核

心が潜んでいるように思われる¹⁵。この点を明らかにするため、次に関連文書における« mouvement réglé »という表現を検討してみよう。

この表現は、表題のほかには、『手引』のなかで一度だけ使用されている。『手引』という文書は、前書き、結び、付記などを除き、本文は大きく二つの部分から構成され、それぞれが文書の二大主題——(1)計算機の内部構造が複雑にすぎるといって「生半可な学者たち」の批判への論駁と、(2)偽造品製作への警告——のひとつを扱っている。こうした文書の構造は従来明確に意識されずにいたが、それは諸家が各々の議論の属すレベルを区別せず、文書を構成するすべての段落を並列的で等価なものとして扱ってきたためである。こうした従来の観点に立つと、『手引』は「単純、容易、便利、迅速」という計算機の四つの特性を長々と論じていることから、新製品の宣伝文書のように見えてしまうのである。しかし別の論考で筆者が明らかにしたように、これら四大特性を論ずる部分は下位レベルの議論として、一段上のレベルの議論(上記の第1の主題)に従属するものなのである¹⁶。

問題の表現は、この学者たちへの反駁の部分に現れる。前後の文脈を理解するため、やや長い引用になる。

Lors donc que ces savants imparfaits te proposeront que cette machine pouvait être moins composée, je te conjure de leur faire la réponse que je leur ferais moi-même s'ils me faisaient une telle proposition, et les assurer de ma part que je leur ferai voir, quand il leur plaira, plusieurs autres modèles, et même un instrument entier et parfait, beaucoup moins composé, dont je me suis publiquement servi pendant six mois entiers, et ainsi, que je n'ignore pas que la machine peut être moins composée, et particulièrement si j'eusse voulu instituer le mouvement de l'opération par la face antérieure, ce qui ne pouvait être qu'avec une incommodité ennuyeuse et insupportable, au lieu que maintenant il se fait par la face supérieure avec toute la commodité qu'on saurait souhaiter et même avec plaisir. Tu leur diras aussi que, mon dessein n'ayant jamais visé qu'à réduire en *mouvement réglé* toutes les opérations de l'arithmétique, je me suis en même temps persuadé que mon dessein ne réussirait qu'à ma propre confusion, si *ce mouvement* n'était simple, facile, commode et prompt à l'exécution, et que la machine ne fût durable, solide, et même capable de souffrir sans altération la fatigue du transport, et enfin que, s'ils avaient autant médité que moi sur cette matière, et passé par tous les chemins que j'ai suivis pour venir à mon but,

¹⁵ 詳しくは以下の拙論を参照。「Rhétorique de la machine arithmétique : signification de son invention dans la pensée de Pascal », in *Etudes de Langue et Littérature françaises*, n° 72, 1998 ; 『秩序と侵犯』(前掲)。

¹⁶ 前注の拙論を参照。

l'experience leur aurait fait voir qu'un instrument moins composé ne pouvait avoir toutes ces conditions que j'ai heureusement données à cette petite machine.

それゆえ、これらの生半可な学者たちが、貴兄 [= 読者] にこの機械はもっと簡単な構造にできたはずだなどと言い出すときには、私自身がそうした場合にはすであろう返答を彼らにぶつけ、私になり代わって次のように言明していただきたいのです。すなわち、私はいつでも彼らの望むときに、別の数台の機種と、さらには、はるかに簡単な構造をもち、私が公の場でまる六カ月使用した完成品さえ一台お見せすることができます。ですから私は、この機械がもっと簡単な構造になりえたこと、とりわけ計算の操作を前面から行なうようにすればそうなったことを、知らないわけではありません。しかしそのやり方では、厄介で耐え難い不便が伴わずにはすみませんでした。それに比べていまの型では、操作が上面からできるため、これ以上は望めないほど便利になり、かつ快適ですらあります。彼らにはまたこうもお伝えいただきたいのです。私の計画は、あらゆる算術計算を規則的な操作に還元するということにしかなかったのですが、それと同時に私が確信したことは、もしこの操作が、単純で容易で便利で迅速に行なわれないかぎり、またこの機械が耐久性と堅牢さを備え、しかも携帯運搬の影響にも狂いを生ずることなく耐えうるものでないかぎり、その計画も私の面目を失わせる結果にしかならないであろうということでした。最後に、彼らが私と同じくらいこの問題について思いをこらし、目的に達するために私のたどったすべての道を自分でも歩んでいたなら、もっと簡単な構造の器具では、私がこの小さな機械に首尾よく付与しえた諸条件を完備などできないことを、自らの経験によって学んでいたであらうでしょう。こうしたことを彼らにお伝えいただきたいのです。(『手引』、第3段落)

この引用からパスカルと学者たちの対立のさまがよく理解できよう。学者たちは器具の構造が複雑すぎると批判するが、それは製作の実際を知らない机上の理論にすぎない。構造の簡単な機種(手動ダイヤルを器具の上面でなく前面に設置した型)ならパスカルはすでに試作済みであったが、その型では使用上の不便が大きすぎる(体をかがめて数値を記入し、体を起して演算結果を読む)というのである。こうした実地の経験を踏まえ、パスカルは使用者の便宜を最優先する道を選択した。彼の当初からの計画(二度繰り返される「私の計画(mon dessein)」という表現に注意)は、「あらゆる算術計算を規則的な操作に還元する」点にこそあったからである。「単純、容易、便利、迅速」という四つの特性は、こぞってこの「計画」の実現に奉仕し、「規則的な操作」を構成する要素なのである¹⁷。こうして構造の複雑さは機械内部に閉じこめられ、それと引き換えに、使用者の便宜を

¹⁷ なお、この「計画」は、『献呈の手紙』では「当初の約束(ce que j'avais promis)」という言葉で表されている。「それにまた、閣下、数学の奥義を底まで究めた数多の学者方のなかには、かように若輩で非力の私が、茨の生い茂る野に、道を切りひらいてくれる先達もないまま、新しい通路をつけようなどと企てたという理由で、私の行為を即座に無謀とみなされるお人もあらうと覚悟いたしております。けれども、私が当初の約束を

優先し、見た目にも端正で扱いのきわめて簡単な製品が完成した。四則計算のすべてが、手動ダイヤルの時計方向への回転という単一の操作で可能となったのである。

以上、文書全体の構成と主題の検討を経て、正しい訳語の決定が可能となる。「*mouvement réglé*」という表現が指示するのは機械上面に設置された車輪型ダイヤルの「規則的な操作」であり、機械内部の「運動」ではまずいことになる。

5

最後に『手引』第9段落における決定的な表現に触れておきたい。第1主題たる学者たちへの論駁の結論にあたる部分である。

Ainsi (cher lecteur), je te conjure encore une fois de ne point prendre pour imperfection que cette machine soit composée de tant de pièces, puisque, sans cette composition, je ne pouvais lui donner toutes les conditions ci-devant déduites, qui toutefois lui étaient toutes nécessaires ; en quoi tu pourras remarquer une espèce de paradoxe, que pour rendre le *mouvement* de l'opération plus simple, il ait fallu que la machine ait été construite d'un *mouvement* plus composé.

それゆえ、(親愛なる読者よ)、この機械がこれほど多くの部品で構成されているからといって、それを欠陥だとお取りにならぬよう、改めてお願いいたします。なぜなら、こうした構造にしなければ、上に詳述したすべての条件〔単純、容易、便利、迅速〕(しかもどれもみな必須の条件なのです)を、この機械に付与することはできなかったのです。貴兄はそこに、計算の操作をより単純化するためには、機械を構成する装置のほうをより複雑化せざるをえなかったという、一種の逆説をお認めになることでしょう。

最後の文において、「*mouvement*」の語の二度の使用のうち、初めが「操作」の意味、二度目が「装置」の意味であることは明らかである。パスカルはここで同一語を隣接させて用いながら、その意味を変容させるという、意識的な修辞法を使っている。「*mouvement plus composé*」(より複雑な装置)が「*mouvement plus simple*」(より単純な操作)を生み出すからこそ、それを「逆説」と呼ぶことができるのである。

すでに述べたように、『手引』における「*mouvement*」の語の使用頻度はきわめて高いものであった。とりわけ生半可な学者たちへの反駁にあてられた第3～9段落においては、この語は14回も繰

正確に守らなかったという立証がおできになるのであれば、私はそうした方々のお咎めも、またご糾弾でさえも、喜んでお受けいたしましょう。」

り返し使用されている。あたかもこの反復自体が、第9段落の同一語における二重の語義の戯れ（一種の言葉遊び）を準備しているような印象すら与えるのである。

ここに見られる同一語の意味をずらしての隣接使用は、やがてパスカルにとって親しいレトリックの技法となる¹⁸。上記の引用文はその最初の使用例にあたる。内部構造の単純さを犠牲にしても操作の単純さを獲得するという、計算機の「逆説」を見事に浮き彫りにするものこそ、「*mouvement*」という同一語の反復使用であり、ここにはパスカルの修辭法のめざましい例証が認められる。学者たちへの反駁を構成する長い論述がこの「逆説」に集約され、この最後の一文によって相手側はとどめを刺されてしまう。同時にこの段落は、「*mouvement réglé*」の訳を「規則的な操作」とすべきであり、「運動」では不適切であることの決定的な論拠となるであろう。

結語

計算機製作の眼目は、手動ダイヤルの規則的な操作によって、四則計算を支障なく実現するところにあった。それが製作者の当初からの企図であり、この目標は見事に実現されたと若き発明家は誇らしく宣言し、その事実を計算機文書の表題として真っ先に掲げる——計算機とは、「ペンも数え札も用いず、規則的な操作によって、あらゆる算術計算を行なうため」の機械なのであると。パスカルのねらいは計算機の内部構造やその運動の単純化・規則化にあったのではなく、あくまでも使い勝手の良さ、操作の単純化にあった以上、表題に用いられる「*mouvement*」は、三つの語義のうち「*mouvement de l'opération*」の意味と解すべきであり、訳語としては「操作」（機械内部の「運動」ではなく、手の運動という意味での「操作」）でなければならない。

本稿の検討がもたらすものは、適切な訳語の決定のみならず、一語の解釈を手がかりとした計算機関連文書の正しい理解への接近であり、ひいてはパスカル思想のより深い把握への道である。この最後の点について、より詳細な議論は、筆者の一連の論考にゆずることとしたい¹⁹。

¹⁸ パスカルは後にこう書くことになる。「ある論述のなかで言葉の繰り返しがあるのを見つけ、それを訂正しようとしても、それがあまりに適切であるためにかえって論述をそこなう恐れがある場合には、そのままにしておかなければならない。これこそそうすべきだというしるしなのだ。」（L. 515, S. 452, B. 48）これは、『手引』第9段落にもよくあてはまる。『プロヴァンシアル』と『パンセ』から若干の例を引いておく。「*Je vous laisse cependant dans la liberté de tenir pour le mot prochain, ou non ; car j'aime trop mon prochain pour le persécuter sous ce prétexte.*」（*Les Provinciales, 1^{ère} lettre*, éd. L. Cognet et G. Ferreyrolles, Bordas, « Classiques Garnier », p. 20）；「*cette suffisance qui ne suffit pas*」（*4^e lettre*, p. 58. 以上二例の強調は原文のまま）；「*Par l'espace l'univers me comprend et m'engloutit comme un point, par la pensée je le comprends.*」（L. 113, S. 145, B. 348）；「*Le cœur a ses raisons, que la raison ne connaît point.*」（L. 423, S. 680, B. 277）。第1例は「近接能力」と「隣人」の言葉遊び。第2例は「十分でない十分な恩寵」という皮肉。第3例は「空間によって、宇宙は私を一点のごとく包み、呑みこむ。思考によって、私は宇宙を包む」となり、二つ目の「comprendre」には、「包含する」と「理解する」の二重の語義がかけあっている。第4例は「心は、理性の知らない、それ自らの理由をもつ」の意。

¹⁹ すでにあげたもののほか、以下の拙論を参照。「パスカルと計算機——発明の思想的意味」（『流域』、第73号、青山社、2013年）；「*La machine arithmétique et les « ordres » pascaliens*», in *XVII^e Siècle*, n° 261, PUF, 2013.